



Column

「敬虔」なるアメリカ人 —キリスト教神学の論理と計量経済学の精神—

勝又 健太郎

海外で生活することの醍醐味は、本場ならではの経験することである。小生は、平成17年の夏に帰国するまでの2年間、米国ニューヨーク州イサカ市にあるコーネル大学大学院で農業経済学を学習する機会に恵まれた。計量経済学の本場で、その学問を産み出し、発展させてきた言語（英語）環境の中で勉強することには、少々不安を感じながらも心躍るものがあった。

渡米直後から始まった秋学期に計量経済学を勉強しながら、生粋のアメリカ人達（プロテスタント）とは、この学問の受けとめ方について曰く言い難い感覚のズレがあった。きっと、自らの理解の仕方が表層的であり、彼らに宿っているはずのいわば「計量経済学の精神」たるものを掴めていないからなのだろうとじれったい思いをしていた。

冬休みになると教官や学生達は、故郷や保養地へ旅出っしまい、大学では、どこに行くあてもないマイノリティをちらほらと見かけるばかりとなった。イサカの冬は非常に寒い。1日の最高気温が零下という状態が3カ月も続く。一番の寒波に見舞われた1週間は、最高気温がマイナス20℃まで下がってしまった。雪国での生活が初めてだったこともあり、生命の危険を感じた。外で気晴らしに散歩でもという訳にはいかない。こんな時は、図書館にこもって勉強するしか時間の潰し方がない。1月下旬から始まる春学期までには、計量経済学にかかっていた心の靄を晴らしたかった。雪に閉ざされた地で、誰にも邪魔されず、時間も気にせず、計量経済学の論理の糸を丹念に辿っていくことを通じて、大げさ

にいえば、ついに「計量経済学の精神」に触れることができたのである。

「計量経済学（Econometrics）」という名称は、ノルウェー出身のフリッシュ（第1回ノーベル経済学賞受賞）が「経済」と「計測」の2語を融合して発案した造語である。そこから察せられるように、この学問は、経済理論に基づいた数学的モデルを設定し、そのモデルに含まれるパラメーターを実際の標本データを用いて統計学の手法により推定するというものである。ここで問題なのは、「有限」な標本を基にした推定値は、「真の値」に一致するとは限らないということである。しかし、「一致性」という概念の発明により、この問題を理論的に乗り越えることができた。つまり、推定値は、標本数を「無限」にすれば、ついには真の値に一致するというのである。かつて「青白き文学青年」だった頃にドストエフスキーを水先案内人として少しかじったことのあるキリスト教神学の論理が突如として脳裏に蘇った。私見では、神学の大きな目的の一つは、「有限」な人間が、「無限」である神の「真の姿」にどうやって接近し、「一致」することができるのかを理論化することである。計量経済学は、千年も長きに渉るキリスト教神学の目的を達成するために、統計学と数学という道具を使って学問的發展を遂げてきたと見ることもできる。まさに、キリスト教神学の末裔なのではないだろうか。そんなことに思いを馳せながら、古色蒼然とした図書館の大きなドーム状の天井を見上げ、窓の外には深々と降り積もりゆく雪を見てみると、自分は、まるで「神（真なるパラメーター）」との「一致」を夢見て、山奥の修道院で一心不乱に神学の勉強に勤しんでいるのではないか、という錯覚に一瞬おそわれたほどである。

米国では、優れたEconometricians（神学者達）によるさらなる理論の精緻化作業と教育（布教）活動が怠りなく進行中である。なんと「敬虔」な学者（信徒）達ではあるまいか。米国滞在中、クリスマスイヴのミサに知り合いの誘いで参加した以外は教会へは一度も訪れたことはなかったが、計量経済学の発祥の地である米国において、意外な側面からアメリカ人の「敬虔」さを実感できたのであった。